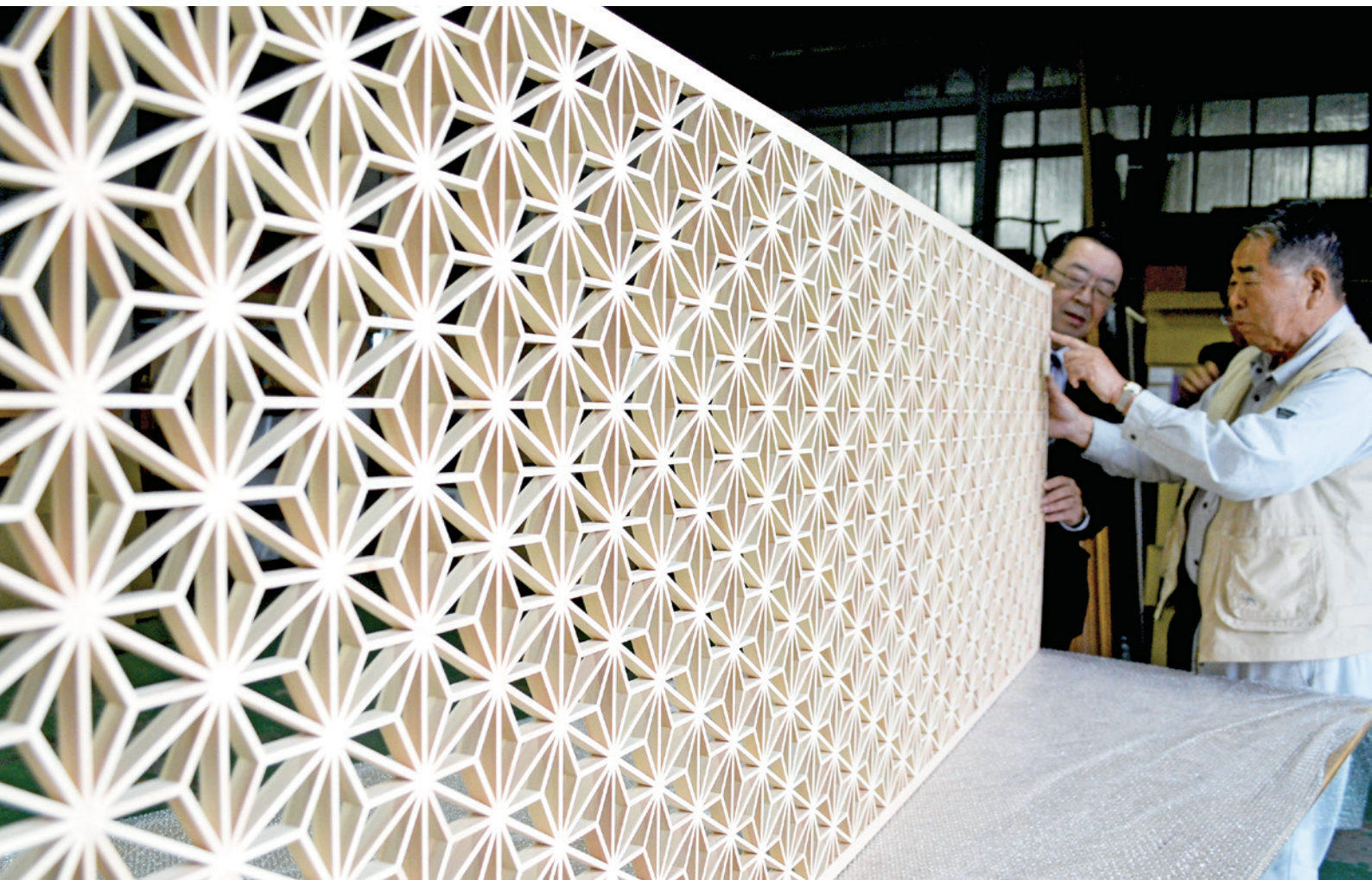


有限会社豊田木工所

代表取締役 豊田 皓平 氏



栃木県鹿沼市に本社を構える有限会社豊田木工所は、1947年(昭和22年)に建具店として創業しました。今年で71周年を迎え、現在、栃木県鹿沼市の伝統工芸「鹿沼組子」を支える老舗の企業として国内外から注目されています。

鹿沼市は日光東照宮を造営した宮大工の末裔が残るまちです。彼らが残した「鹿沼組子」は、和室を飾る最高の贅沢品と称されてきました。

時代の流れとともに日本人の生活スタイルは変化しましたが、同社社長の豊田氏は、これからの時代に合う新しいデザインの創造や次代に技術を伝承するために、日々精力的に事業を展開しています。豊田社長の「鹿沼組子」に対する熱い想いをお聞かせいただきました。

インタビュー日：2018年10月18日
〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕
〔文・写真：筑波総研(株) 研究員 富山かなえ〕

企業概要

本社：栃木県鹿沼市戸張町2357
創業：1947年(昭和22年)
従業員：4名
事業内容：建具や鹿沼組子の製造・販売

豊田社長が事業に携わるまでのご略歴や鹿沼市の特徴についてお聞かせください。

「木工のまち」の建具店の3代目として生まれる

私は、生まれも育ちもここ鹿沼市です。1945年（昭和20年）に生まれ、地元の高校では野球部に所属しながら青春時代を過ごしました。

実家は、建具職人であった祖父・米作が1947年（昭和22年）に創業した建具店でした。祖父は建具を通して、関東大震災や戦後の復興に貢献しました。

私が高校を卒業する頃には、父・定一が2代目として店を切り盛りしていました。私は将来的に家業を継ぐための修行として、神奈川県川崎市にある家具の販売店に18歳で就職しました。

当時、鹿沼市内には多くの建具店が立ち並び、店を継ぐ予定の子どもたちは、業界でのパイプを強く太くするために、若い時に都内近郊へ修行に出ることが当たり前の時代でした。

私が修行に出た1963年（昭和38年）は、「東京オリンピック」を目前に控えた年でした。また、戦後からの復興に向けた建設工事なども盛んで、日本は好景気に包まれていました。

日本各地で住宅地が造成され、住宅が着々と建設されていきました。それにともない木製建具の需要も高まり、私は東京をはじめ千葉、埼玉、群馬などに多くの建具を納品していきました。

「東京復興の建具産地」であった鹿沼市

修行先の販売店では、会社経営の基礎となる営業戦略や経理、在庫管理などの業務経験を通じ、様々な知識を得ることができました。

修行を終えた私は故郷・鹿沼に戻り、当社に入社しました。入社後は都内での経験を活かし、首都圏や関東の各都市、時には名古屋まで、当社自慢の建具を広く販売していきました。

鹿沼市は首都圏から約100kmと近く、当時は「東京復興の建具産地」として発展し、市内の各建具店は大変繁盛していました。その様子を見たまちの肉屋や魚屋の店主たちも「儲かる建具屋」に転身するほどでした。

全盛期には、市内に800もの建具店があったといわれ、建具を載せた大型トラックが国道4号を走って都内に向かう姿が日に何度も見られました。

「木工のまち」として栄えてきた歴史と現在のまちの状況についてお聞かせください。

日光東照宮を造営した宮大工の末裔が残る

鹿沼市が「木工のまち」として栄えたルーツは、今から約400年前の江戸時代に遡ります。この地には現在の鹿沼市の基礎となる「鹿沼宿」が整備され、日光への交通の要衝として栄えていました。

鹿沼から北に約30kmの場所には、徳川家康が眠る「日光東照宮」があります。故家康の13回忌に合わせて本殿を造営するにあたり、当時から良質なスギやヒノキなど豊かな木材資源に恵まれていた鹿沼の地に、各地から腕利きの宮大工や職人が集結しました。

職人たちは、寒さ厳しい冬の時期に鹿沼で木材を加工し、夏になると日光へ移動して造営作業に勤しんだといわれています。日本屈指の装飾技法を駆使して造られた豪華絢爛な日光東照宮は、1636年（寛永13年）に完成しました。

その後、卓越した技術を持った職人たちは、そのまま鹿沼の土地に定住し、彫刻や建具、組子などの技術を後世に伝えていきました。

1780年（安永9年）から行われている「鹿沼今宮神社祭の屋台行事」は、彼らの技術を活かした「彫刻屋台」がまちを練り歩く祭りで、2016年（平成28年）に「ユネスコ無形文化遺産」に登録されました。

時代の変化にともない、担い手が不足

しかし、時代の流れとともに日本人の生活スタイルは変化し、和風の家から洋風の家が好まれるようになりました。

畳がフローリングに、障子がカーテンに変わったことで、建具の需要は以前に比べて激減し、鹿沼の建具店も大きな衝撃を受けました。

当社は、先代の頃から建具製造を主軸に展開してきましたが、時代の変化を早めに読み解き、「鹿沼組子」の製造にも注力したため、現在も安定した事業を展開することができています。

どのような状況でも、長年培われた技術と伝統を次代につなげていくことが、私たち伝統工芸職人の使命です。しかし、職人の高齢化が年々進み、さらに仕事も減少しているため、伝承には大変苦心しています。

「鹿沼組子」の特徴やその魅力、伝承活動などについてお聞かせください。

和室を飾る最高の贅沢品「鹿沼組子」

「鹿沼組子」は、これまで日本家屋の欄間や書院障子などに用いられることが多く、「和室を飾る最高の贅沢品」と称されてきました。

組子を製造する際、釘や金具などは一切使用しません。厳選した国産ヒノキの柱目の部材(棧)に切込みを入れ、多数の部材を一つひとつ手作業で組み込んでいきます。

その正確な組み込みは、熟練の組子職人のみが織り成すことができる日本独自の技術です。現在、鹿沼組子は「栃木県伝統工芸品」と「かぬまブランド」の指定を受けています。



この厚さの組子製造は非常に難しく、豊田木工所に所属する職人にしか作れないという

子どもたちに伝統工芸の魅力を伝える

木製建具の需要減少にともない、市内の建具店は事業縮小を余儀なくされました。以前は当社も15名ほどの職人が在籍していましたが、事業縮小により、現在の従業員は4名です。

しかし、近年はHP作成など広報担当者や若い男性を採用するほか、別途で契約している外部の若い職人やデザイナーなど約10名と連携しながら、事業の拡大に取り組んでいます。

また、当社は人財育成活動の一環として、10年前から地元の小学校に出向き、「鹿沼組子」の魅力を伝える体験会などを毎年実施しています。

さらに、私自身は、「とちぎの技委員会」の会長として、鹿沼組子だけでなく、栃木県全体の伝統工芸の魅力発信活動などにも取り組みました。

御社の「鹿沼組子」のコンセプト、導入されている場所や製品についてお聞かせください。

国内外の大手企業から注文が相次ぐ

当社は職人が持つ技術をそのまま活かしつつ、現代にも合う新しいデザインの組子を作り続けています。コンセプトは「見た目も美しく、機能性も高く、生活の一部となる組子製品」です。

当社の組子は、宿泊施設をはじめ商業施設や一般住宅などでご使用いただいています。また、組子技術を活かし、展示施設の装飾から小さな什器の製造まで対応可能です。

例えば、「星野リゾート 界 日光」では、組子を施した建具が客室の装飾品として取り入れられました。また、ルームキーにも採用され、同ホテルのお土産品として大変な人気です。

当社を訪問されるお客さまの中には、「昨日、宿泊したホテルで見た組子があまりにも素敵だったので、帰り道、鹿沼に寄りました」と言ってくる方もいて、職人冥利に尽きる想いです。

また、栃木県庁の県知事室や議会には、当社の組子作品が飾られており、県所有の施設にも多数の什器を納品しています。

さらに、国内の大手時計メーカーには、女子プロテニスの大坂なおみ選手が試合中に使用していた高級腕時計を収めるケースの装飾に、当社の組子を採用していただきました。現在、限定1,000個のケース完成に向けて取り組んでいます。

大手企業と仕事をするとは勉強になることも多く、特に検品の厳しさには驚いています。今後も国内外の様々な業界の企業とのネットワーク構築を進めていきたいと考えています。



高級時計を収納する限定ケース製造の様子

【日本一の麻の産地・鹿沼と「麻の葉模様」】

組子の魅力は華やかさ、そして“遊び”ができることです。組子の種類は200以上もあり、それらを器用に組み合わせることで、いくつもの美しい模様を生み出すことができます。

組子が光に照らされる空間では、「贅沢とはこういうものか」と気付かされ、まるで芸術作品のような美しい組子は「生活に組み込むアート」として、海外で高い評価を得ています。

当社が最も多用する模様は、「麻の葉」です。麻は古くから神聖な植物とされ、「魔を除ける呪力がある」といわれています。現在、国内産の麻は、その多くが鹿沼市北西部で生産され、「野州麻ブランド」として全国に出荷されています。

私は、麻の産地である鹿沼の職人たちが、美しい麻の葉模様の組子を創り出していることが、お客さまの心を惹きつける1つの理由になっているのではないかと感じています。

また、当社は、「鹿沼組子」と「麻の葉模様」の魅力を広く伝えるため、日本最高級の本曾ヒノキを使った「鹿沼組子作成キット」を販売しています。

キットには加工済みの部材と説明書を同封しており、職人の繊細な技術を誰でも気軽に体感できるとして、大変好評をいただいています。

今後の事業戦略についてお聞かせください。

【技術をつないでいくことが「産地の使命」】

これまで当社の「鹿沼組子」は、ホテルや旅館などに宿泊するお客さまに最高のおもてなしを提供する装飾品として採用される場合がほとんどでした。

しかし、現在は、広く鹿沼組子の魅力を伝えるために、コースターやランプシェイド、スマホスピーカー、キーホルダーなど、日常的にご使用いただける生活雑貨の製造にも力を入れています。

1つの大きな「装飾品」の製造も重要ですが、多くの方が手の届く「日常品」を作っていくことで、裾野が広がると考えています。また、これは他の地域でも言えることですが、一社だけが伸びても、その地を「産地」と言うことはできません。

私は、鹿沼の伝統を守り続けるために、繊細で精度の高い技術と伝統を次の職人へつなぐ仕組みを作ることが必要であると考えています。



「麻の葉模様」の組子が施されたスマートフォン用スピーカー

【「鹿沼組子」の魅力を国内外へ発信】

同じ地域にどっぷり浸かると、その状況に慣れ、本来の感覚が鈍るということがあると思います。しかし、当社は都内で開催される多数の展示会への出展を通して、多くの企業に出会うことで刺激を受ける機会を増やしています。

ここでは、問屋を通さず、当社の技術や組子の価値を理解した企業と直接交渉ができるため、対等な立場で価格設定を行うことができます。

私は鹿沼がこれまで培ってきた伝統を守り抜くためには、今後も行政や金融機関、JETROなどと積極的に連携し、数多くのバイヤーとのネットワークを作りながら、「鹿沼組子」の魅力を国内外へ強く伝えていくことが重要であると考えています。

「素材は地域にある」。これを念頭に置きながら、これからの時代に合う新しいデザインや仕組みづくりのために、今後も様々な人と出会い、鹿沼組子の製造と伝承活動に力を入れて参ります。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。



豊田社長(中央)、鹿沼支店 川崎支店長(左)と聞き手・藤咲耕一